

## マレーシアのイスラームと政治

——「東南アジアのイスラームと政治」セミナーの報告から——

左右田直規（国立民族学博物館）

「近代化＝世俗化」という社会科学のかつての常識を覆すかのように、イスラームは近代化のうねりの中でむしろ生命力を増しているように見える。東南アジアのイスラームもその例外ではない。なかでもイスラームを公式宗教として掲げるマレーシアでは、地域社会から国家、国際関係に至る様々な位相において、イスラームの影響力の高まりを感じずにはいられない。地域に根ざした視点から、東南アジアひいてはマレーシアのイスラームの実像を描き出す必要性は、近年ますます強まっているといえるだろう。

このような時代の要請を反映してか、2001年7月21日（土）および22日（日）に上智大学で開催された「東南アジアのイスラームと政治」と題するセミナー<sup>1</sup>にも数十名が参加し、活発な議論が繰り広げられた。同セミナーでは、インドネシア、フィリピンおよびマレーシアの各地におけるイスラームと政治・社会との関わりについて、6つの報告がなされた。ここでは、マレーシアのイスラームを扱った多和田裕司氏（大阪市立大学）と長津一史氏（京都大学）の2つの報告に絞って議論の要点を紹介することにしたい<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 東南アジア史学会関東部会、イスラーム地域研究プロジェクト1班・2班および上智大学アジア文化研究所の共催による。

<sup>2</sup> 両氏以外の報告・講演のタイトルは以下の通りであ

まず、多和田氏の報告「マレー村落におけるイスラーム実践：政治的文脈のなかで」は、クランタン州のマレー人村落におけるイスラーム実践に焦点を当て、日常生活におけるイスラームの「権威」に関する洞察に満ちた議論を展開した<sup>3</sup>。

多和田氏は、イスラーム実践の具体例（コーランの詠唱法、「浄め」の水、コーランの所有など）に触れながら、同村落における社会関係は、イスラームに由来する様々な差異（知識、経歴、指向性、師弟関係等々）に基づく権威と、経済的關係に基づく力との両者が絡み合いながら形成されてきたものだと主張する。

そのイスラームの権威には以下の3つの特徴がある。第1は権威の連鎖性である。日常

---

る。西芳実「アチェにおける分離主義的運動の展開とイスラーム」、小林寧子「インドネシア婚姻法成立をめぐる諸問題」、Nasaruddin Umar “Islamic Paradigm on Women”、川島緑「1930年代フィリピン・ムスリム村落首長層の保守的的民族主義：米国統治継続請願の再検討」。

<sup>3</sup> 本報告に関連する多和田氏の研究成果として以下のものがある。多和田裕司「現代マレーシアにおける『イスラーム化』の展開：クランタン州における『イスラーム化』政策と政治対立」『長崎大学教養部創立30周年記念論文集』、1995、pp.103-126；同「イスラームという力：マレー・ムスリム社会における文化的理念への指向」青木保（他編）『岩波講座 文化人類学 第6巻 紛争と運動』岩波書店、1997、pp.259-281。

生活の様々な状況において、権威の連鎖の中での自己や他者の相対的な位置付けが常に確認されている。第2は権威の瞬時性である。連鎖性を特徴とする権威の高低はもともと相対的なものにすぎないのだが、一瞬一瞬の状況の中ではそれが絶対化し、各々のムスリムの宗教実践に影響を与える。第3は権威の複数性である。A村の場合、ふたつの宗教的党派の流れを受け継ぐリーダーそれぞれの権威を中心に成立した社会関係が、そのまま政治対立——具体的には統一マレー人国民組織（UMNO）、汎マレーシア・イスラーム党（PAS）、46年精神党（S46）とのあいだの政党間対立——に転化している。宗教行政機構に由来する権威もまた絶対的ではなく、複数の権威のあいだに競合関係が成立している。

イスラームに内在する「差異化」「権威性」の力が、日常的な宗教実践のなかで党派的な社会関係という形をとってあらわれ、それが厳しい政治的対立と結びつく場合には、イスラームが「政治の道具」として用いられるようになる、というのが多和田氏の論旨である。

続いて、長津氏の報告『「正しさ」の諸相——マレーシア・サバ州、海サマ人のイスラーム化と儀礼再編』は、州・国家によって制度化される公的イスラームと地域社会の宗教実践とのあいだの相互関係について示唆に富む視点を提供した<sup>4</sup>。

---

<sup>4</sup> 本報告に関連する長津氏の論文として次のものがある。Nagatsu Kazufumi, "Pirates, Sea Nomads or Protectors of Islam? A Note on 'Bajau' Identifications in the Malaysian Context," 『アジア・アフリカ地域研究』1 (March 2001): 212-230.

長津氏は海サマ人のイスラーム化を以下の3つの局面において考察する。

まず第1に、海サマ人社会の周辺域においては、行政によって上から制度化された公的イスラームが浸透し、住民の宗教観や宗教実践の典拠になった。かつてスルー海域のタウスグ人に由来したイスラームの権威は、サバ州およびマレーシア国家の公的機関や、マレー人ないしマレーネスとでもいべきものに取り替わられるようになった。

第2に、かつて周囲のムスリム集団から正統なムスリムとみなされずに差別されてきた海サマ人は、公的イスラームを積極的に受容し、公的権威に依拠することによって、被差別的状況からの脱却と社会的地位の向上を試み、かなりの程度それに成功した。

第3に、公的イスラームの浸透は村での宗教実践にも大きな影響を及ぼした。一部の伝統儀礼は非イスラーム的という理由で破棄されたが、他の伝統儀礼は公的イスラームの規範と矛盾しないように再編されることで生き残った。

長津氏の議論をまとめると、海サマ人は公的イスラームを積極的に受け入れることで地位向上を達成しながらも、公的イスラームの規範にただ受動的に従うのではなく、能動的に対応しながら、みずからの信仰と儀礼を再編している、ということになる。

多和田氏と長津氏の報告については、それぞれ鳥居高氏（明治大学）および山本博之氏

(東京大学) が丁寧なコメントを加えたほか、飯塚正人氏 (東京外国語大学) ならびに加藤剛氏 (京都大学) は他の報告も含めて総合的な講評を行った。会場からも数多くの質問が寄せられ、中身の濃い議論が繰り広げられた。個々の議論を紹介することは紙幅が許さないので、代わりに、議論の内容を踏まえつつ、両報告の意義と疑問点ならびに将来的な課題について筆者の私見を述べることにしたい。

マレーシアにおけるイスラームと政治に関する先行研究を振り返ると、半島部を中心として全国的に組織化された政治運動としてのイスラームに関するマクロな研究が多い。関心の焦点は、UMNO 対 PAS というマレー・ムスリム系政党の対立を軸にした政党政治や、1970 年代後半以降にさかんになったイスラーム復興 (dakwah) 運動であった<sup>5</sup>。

他方、マレーシアのムスリム社会に関する近年の政治人類学的研究に目を転じてみると、宗教実践よりもむしろ社会経済構造に焦点を当ててものが目立つ。それらの作品は、UMNO-PAS 間の対抗関係をはじめとする草の根の政治対立を、持てる者と持たざる者とのあいだの階級対立の表出として説明する

---

<sup>5</sup> 例えば以下を参照。N. J. Funston, *Malay Politics in Malaysia: A Study of the United Malays National Organisation and Party Islam*, Kuala Lumpur: Heinemann k Books (Asia), 1980; Judith Nagata, *The Reflowering of Malaysian Islam: Modern Religious Radicals and Their Roots*, Vancouver: University of British Columbia Press, 1984; Hussin Mutalib, *Islam and Ethnicity in Malay Politics*, Singapore: Oxford University Press, 1990.

傾向が強く、日常の宗教実践と政治との関わりについてはさほど重視していない<sup>6</sup>。また、管見の限りでは、ボルネオ地域については政治人類学的な研究そのものが少ないようである<sup>7</sup>。

このような研究状況を考えると、長期の村落調査に基づいて、日常生活における「普通の」ムスリムにとってのイスラーム実践と政治行政との相互関係を明らかにしようと試みる、多和田氏と長津氏の人類学的研究の意義は大きい。

これらふたつの報告について筆者が何よりも感心させられるのは、フィールドワークに裏打ちされた記述の分厚さである。両氏ともに、調査地のムスリム住民との日常的なつきあいのなかで宗教実践を粘り強く観察し、可能な限り内側からの目でもってかれらの精神世界や行動原理を感じ取ったうえで、あくまで社会生活の文脈のなかで出来事や行為の意

---

<sup>6</sup> 階級を重視する政治人類学的研究としては次のものが優れている。Clive S. Kessler, *Islam and Politics in a Malay State: Kelantan 1938-1969*, Ithaca and London: Cornell University Press, 1978; James C. Scott, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, New Haven and London: Yale University Press, 1985; Shamsul A.B. *From British to Bumiputera Rule: Local Politics and Rural Development in Peninsular Malaysia*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 1986.

<sup>7</sup> 政治に焦点を当てたものではないが、海サマ人社会についての人類学的研究としては次の著作が代表的である。Clifford Sather, *The Bajau Laut: Adaptation, History, and Fate in a Maritime Fishing Society of South-eastern Sabah*, Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1997.

味を解釈している。両氏が、卓越した対人能力、観察眼、感受性、思索力をフルに働かせて、質の高いフィールドワークを行ってこられたことが推察される。両氏の研究は、マレーシアのイスラームと政治行政に関する民族誌的研究の最前線を示すものといってよいだろう。

多和田氏の報告は、一村落の日常生活のなかでの何気ない出来事を丹念に拾い上げながら、状況に応じた「権威」によるイスラーム解釈・実践がなされる有様を生き生きと描きだしている。具体的な出来事の意味を解釈し、政治的文脈のなかに位置付けることによって、イスラームの権威に由来する社会関係が政治対立に転化するメカニズムを巧みに浮かび上がらせている。マレー村落における政党間の対立を理解するには、政党間のイデオロギー論争や階級対立という要因だけではなく、日常的な宗教実践の場におけるイスラームの権威という要因にも注意を払うべきだ、という多和田氏の主張は傾聴に値する。

長津氏の報告にも、現地体験に根ざした複眼的な洞察がある。一方では、イスラーム化の目的合理的で手段的な側面が指摘される。海サマ人による公的イスラームの積極的な受容は、被差別的状況からの脱却と社会的地位の向上を目指す一種の生存戦略であるという。しかしながら、他方で、目的合理性に還元しきれない情動の部分にも目が向けられている。海サマ人は、公的イスラームに抵触しないように伝統儀礼を再編しながら、普遍的なイスラーム的規範と海サマ人の精神世界の両立・

融合を図っており、海サマ人の宗教実践の変容を単なる社会上昇のみに動機付けられた受動的で機会主義的な行動だと単純化してはいけないという。また、長津氏の研究は、半島部に比べて研究の蓄積が不足しているボルネオ地域のムスリム・コミュニティを対象としている点においても貴重だといえよう。

さて、両氏の報告を相互に比較検討することによって、いくつかの重要な課題も浮かび上がってきた。無いものねだりとのそしりを受けるかもしれないが、当日のコメントや議論の内容を踏まえつつ、思いつくままに今後の課題を列挙してみたい。

第1の課題は、イスラームと経済との関係である。イスラームの権威に由来する社会関係と経済権力に依拠する社会関係はどのように連関しているのだろうか。多和田氏は調査村における社会関係はイスラームの権威と経済権力の両者が絡み合ったものだと結論づけるが、報告では経済についてはあまり言及されなかった。階級対立を重視するいくつかの重要な先行研究（注6参照）と多和田氏の研究とを関係づけるためにも、宗教的権威と経済権力がどのような相互関係にあるのかを知りたい。長津氏の研究についても同様の課題を設定できるだろう。

第2の課題は、イスラームの権威の多元性と一元性についてである。クランタンのマレー人社会をフィールドとする多和田氏が、イスラームの権威の複数性と競合性を強調しているのに対して、サバの海サマ人社会を対象とする長津氏の報告は、イスラームの権威が

宗教行政機関によって伝達される公的イスラームのラインに一元化されていく側面に焦点を当てている。なぜ、このような差異が生じるのだろうか。

イスラームの権威の複数性ということに関連していえば、イスラーム行政における連邦と州との関係についても検討の余地がある。連邦憲法において宗教は州の管轄事項だと定められているが、近年、連邦政府も宗教機関を続々と設置し、宗教行政への介入を強めている。イスラームの権威が複数あり、行政機構上の権威が絶対ではない、という多和田氏の議論は説得的だが、そもそも「行政機構上の権威」それ自体は単数なのか複数なのか。クランタンのように連邦野党の PAS が州政権を握っている場合、公的イスラームを伝達する宗教行政の権威そのものが、州と連邦の 2 つのラインに分かれていると見てよいのだろうか。他方、長津氏の報告の中では、サバ州と連邦が「国家」の名のもとに一括りにされている。サバの海サマ人社会の場合、ともに国民戦線政権下にある州と連邦が一体となって公的イスラームを伝達していると理解してよいのだろうか。

第 3 の課題は、イスラームの権威に由来する社会関係が政治対立（典型的には政党間対立）に転化する条件を知ることである。多和田氏が指摘するようなイスラームの権威に由来する社会関係は、マレーシア各地のムスリム村落で（程度の差こそあれ）かなり一般的に成立していると推測される。しかし、イスラームの権威に由来する社会関係は、クラン

タンを含む半島マレーシア北部では、激しい政治対立——具体的には UMNO-PAS の政党間対立——というかたちをとってあらわれているのに対して、半島南部やサバ・サラワクでは、そのような現象がさほど顕著にあらわれないようにみえる。なぜなのだろうか。他方、長津氏の報告からは、海サマ人社会のイスラームは政治というよりは行政の文脈で理解した方がよいという印象を受けた。イスラームの権威をめぐる社会関係が政治対立に転化する、というクランタンのマレー人社会の構図が、海サマ人社会にはあてはまらないのだとしたら、両者の違いはなぜ生じるのだろうか。

第 4 の課題は、複数の国家を横断して存在するムスリム・コミュニティにとっての国家の意味である。この課題については、長津氏が、マレーシア、フィリピン、インドネシアにまたがる海サマ人世界を相互に比較し、周縁社会にとっての国家の意味について重要な問題提起を行っている。この問題意識は、多和田氏が研究対象としているマレー半島東海岸のマレー・ムスリム世界にも応用できるのではないだろうか。歴史を遡ると、マレー半島東海岸のマレー人社会には、パタニを中心とする宗教的ネットワークが成立していたといわれる。イスラームを公式宗教としムスリムが政治的主導権を握るマレーシア領地域と、仏教を国教としムスリムはマイノリティであるタイ領地域とのあいだで、宗教実践と政治との関わりにどのような共通性と相違がある

のだろうか<sup>8</sup>。

以上の課題を含め、マレーシアのイスラームと政治に関わる問題群に取り組むうえで欠かせないのが、比較の視座である。

第1に、マレーシア国家内の地域間比較が必要である。イスラーム行政が州の管轄にあるマレーシアにおいては、とりわけ州を異にする複数のムスリム社会の比較が重要といえよう。また、ムスリム社会だけでなく、非ムスリム社会にとってのイスラーム化も比較の対象に入れることによって、より多面的な理解が可能になるだろう<sup>9</sup>。さらに、急速に都市化するマレーシアにおいては、村落部のみならず都市部の「普通の」ムスリムも視野に入れ、両者の共通性と相違、相互連関を明らかにすることも求められるであろう。

第2に、国家を異にする地域間の比較、特に国境を挟んだ隣接地域間の比較が必要である。南タイ、シンガポール、スマトラ、カリマンタン、ミンダナオなど隣接地域のムスリム社会との比較研究によって、それぞれの国家と地域住民との相互作用について重要な知見が得られるだろう。すでに述べたように、長津氏の海サマ人社会の比較研究は先駆的な試みのひとつである。

有意義な比較を行うためには、まず、今回

の多和田氏と長津氏のように異なる地域を対象とする研究者相互の意見交換を重ねることが望ましい。さらに、個々の研究者が、主たる対象地域以外にも関心を広げ、定点観測地点を複数もつことによって、できる限り「点」の理解を「面」の理解に発展させていくことができれば理想的である。とはいえ、一個人が長期のフィールドワークを行う機会は限られている。比較のためには短期調査や2次文献を活用すればよいと思う。最後に、特定のコミュニティを対象とする人類学者・社会学者と、州政や国政を広くカバーする政治学者との連携も求められるだろう。その意味で、今回、鳥居氏と山本氏がコメンテーターとして議論に加わったのは有意義なことだった。

思いつくままに課題を列挙したが、これらの課題は一個人の手で一挙に克服できるものではない。複数の研究者が手分けしながら、少しずつ着実に取り組めばよいと思う。

最後に、セミナーの主催者の方々、報告者や討論者の方々、なかでもマレーシアのイスラームと政治に関する人類学的研究の最前線を示して下さった多和田氏と長津氏に心より敬意を表したい。また、これからフィールドワークに向かわれる若手研究者の方々からも、両氏に勝るとも劣らぬ研究成果が続々と産み出されることを期待したいと思う。

---

<sup>8</sup> 半島北西部のマレーシア・タイ国境地帯のムスリム社会については、黒田景子氏（鹿児島大学）、中澤政樹氏（九州産業大学）、西井涼子氏（東京外国語大学）らの研究がある。

<sup>9</sup> この点については、信田敏宏氏（東京都立大学）によるオラン・アスリのイスラーム化についての議論が参考になる。